

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：26201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10355

研究課題名(和文) 外来化学療法を受けるがんサバイバーのストレンクス尺度の開発

研究課題名(英文) Development of a Strengths Scale for Cancer Survivors Receiving Outpatient  
Chemotherapy

研究代表者

岩本 真紀 (Iwamoto, Maki)

香川県立保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：80314920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、がんサバイバーの力をストレンクスの視点から測定し、ストレンクスを基盤とした看護援助の評価に役立てるため、外来化学療法を受けるがんサバイバーのストレンクス尺度を開発することを目的とした。先行研究と予備調査をもとに、29項目からなる尺度原案を作成した。外来化学療法を受けるがんサバイバーを対象に調査を実施し、147名の回答を得た。因子分析の結果、「生活に張りがある」「治療と生活のバランスがとれている」「自分の望む前向きな生活を送っている」と命名し、累積寄与率は52.92%であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、がんサバイバーのもつ力をストレンクスの視点から測定できる点である。ストレンクスは、どのような時期にあったとしても活用できる力であり、看護者がストレンクスを引き出し、支えていくことは、がんサバイバーが自分の力で自分らしく生きられるよう支援することにつながる。このような生きるための力を測定するための尺度は見当たらず、外来化学療法を受けるがんサバイバーへの生き方を支援するプロセスにおいて有用で臨床活用性の高い測定用具と考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a strength scale for cancer survivors undergoing outpatient chemotherapy in order to measure the strength of cancer survivors from a strengths perspective and to help evaluate strengths-based nursing assistance. Based on previous research and preliminary surveys, a draft scale consisting of 29 items was prepared. A survey of cancer survivors undergoing outpatient chemotherapy was conducted and 147 respondents were obtained. As a result of the factor analysis, they were named as "tense in life," "balanced between treatment and life," and "living a positive life that they want," and the cumulative contribution rate was 52.92%.

研究分野：がん看護学

キーワード：がんサバイバー スtrenクス 尺度開発 がん看護

## 1. 研究開始当初の背景

がん治療の進歩に伴い、がんと診断された後も長期に生きることが可能となり、がん患者はがんを乗り越えて生きる主体者と捉えられ、「がんサバイバー」と表現されるようになってきている。化学療法では、新規抗がん剤の開発、支持療法の進歩に加え、QOLの視点からも外来化学療法が普及しており、がんサバイバーは様々な問題に対して、自宅での生活を基盤に自分自身の力で対処していかなければならない<sup>1)</sup>。外来化学療法を受けるがんサバイバーの力に焦点をあてた先行研究の多くは、セルフケア能力<sup>2-4)</sup>や自己効力感<sup>5)</sup>に焦点があてられ、外来で化学療法を継続していくための対処能力として捉えられ知見が出されている。

ストレングスは、個人のもつ力に焦点をあてた支援の必要性から生まれた概念であり、誰でも、どのような状況にある人でも、まだ発見されていない無限の力があるという前提のもとに、個人のもつ力を尊重し、活かしていこうとするものである<sup>6)</sup>。Rappら<sup>7)</sup>は、ストレングスを「人が自分自身の生活世界の中で築いてきた経験や価値、力、強さ」と定義しており、ストレングスの視点をういた支援は、主体性と人間らしさの獲得につながると述べている。ストレングスが外来化学療法を継続していくための対処能力としてだけでなく、自分らしく豊かに生きていくための力としても有効な概念であるといえる。

がんサバイバーの人生は、がんと診断された瞬間に始まり、治療から寛解期、再発、人生の終焉まで連続的に続くものであり<sup>8)</sup>、自分の力を発揮することが難しい状況に陥ることも考えられる。一方、ストレングスは、「それぞれがもつ、生きていく力」と意味づけられ<sup>9)</sup>、どのような状況にあっても誰もがもつ力であり、失われるものではない。このような生きるための力を測定する尺度は見当たらず、外来化学療法を受けるがんサバイバーへの生き方を支援するプロセスにおいて有用で臨床活用性の高い測定用具となると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、外来化学療法を受けるがんサバイバーのストレングス尺度を開発することである。

## 3. 研究の方法

### 1) ストレングス尺度原案の作成

尺度原案は、先行研究<sup>10)</sup>で導き出した5つの構成要素(「方向性」「強み」「エネルギー」「結びつき」「拡張」)を基盤に、ストレングスに関わる文献と、外来化学療法を受けるがんサバイバーの力を主たるテーマにしている先行研究から、外来化学療法を受けるがんサバイバーのストレングスを表している内容を抽出し、質問項目を作成した。

### 2) がん看護専門職者への内容妥当性とがんサバイバーへの表面妥当性の検討

がん看護専門看護師15名に、ストレングス尺度原案に対して、「非常に適切」~「不適切」の4段階で回答を求めた。また、調査項目に不足や重複した意味内容はないか、わかりやすい表現であるかについて、自由記述で回答を求めた。

がんサバイバー5名に、ストレングス尺度原案に対して、「非常にそう思う」~「全くそう思わない」の4段階で回答を求めた。また、意味がわかりにくい項目はないか、また回答しにくい項目はないかについて、自由記述で回答を求めた。

がん看護専門看護師の回答から、内容妥当性指数が0.62以下の項目を削除し、自由記述の意見をもとに質問項目の追加修正を行った。がんサバイバーの回答からは、答えにくい項目を削除し、わかりにくい項目については表現を修正した。

### 3) ストレングス尺度の妥当性の検討

がん診療連携拠点病院等で外来化学療法を受けるがんサバイバーに対し、質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、作成したストレングス尺度及びがん薬物療法における QOL 調査票 [Quality of Life Questionnaire for Cancer Patients Treated with Anticancer Drugs : QOL-ACD ]<sup>11)</sup>、日本語版自己評価式抑うつ尺度 [Self-rating Depression Scale : 日本語版 SDS]<sup>12)</sup>、属性として、年齢、性別、がんの種類、がんと診断されてからの期間、PS (performance status)、同居の有無、仕事の有無とした。

#### 4 . 研究成果

外来で化学療法を受けているがんサバイバー147名の回答を得た。

研究対象者の平均年齢は68.9歳で、40歳代が3.4%、50歳代が14.5%、60歳代が26.9%、70歳代が44.8%、80歳代が10.4%であった。性別は、男性が47.9%、女性が52.1%であった。がんと診断されてからの平均期間は2.7年であり、がんの種類は、大腸がんが15.2%、乳がんが10.3%、胃がんが6.9%、肺がんが6.2%であった。PSは、81.4%が0または1であった。また、仕事をしていない者が71.5%であった。配偶者と同居している者は75.2%であり、8.3%は独居であった。

天井効果及び床効果を検討し、3項目を削除した。項目間相関を求め、0.65以上の組み合わせとなる項目から、5項目を削除した。

最尤法 (Varimax) による因子分析を行い、因子負荷量が0.4に満たない項目(7項目)を削除し、3因子解を採用した。第1因子は、「私は誰かの役に立っている」「私には生きがいと思えることがある」「私には拠り所となるものがある」などを含み、【生活に張りがある】とした。第2因子は、「私は自分が納得いく治療を受けている」「私には身体を任せられる医療者がいる」「私は自分でも治療を頑張っている」などを含み、【治療と生活のバランスがとれている】とした。第3因子は、「私には気分転換する力がある」「私には楽しいと思えることがある」「私は自分が思うように過ごしている」を含み、【自分の望む前向きな生活を送っている】とした。累積寄与率は52.92%であった。

基準関連妥当性の検討のために、ストレングス尺度全体の合計点及び3因子の合計点とがん薬物療法におけるQOL調査票の合計点、日本語版自己評価式抑うつ尺度の合計点の相関係数を算出した。ストレングス尺度全体の合計点及び3因子の合計点とQOLの合計点には弱い正の相関が認められた。ストレングス尺度全体の合計点とうつの合計点には負の相関が認められた。ストレングス尺度の3因子の合計点とうつの合計点には弱い負の相関が認められた。

#### 引用文献

- 1) 佐藤三穂ら：外来化学療法を受ける患者の精神的問題とその関連要因の検討，日本がん看護学会誌，24(1)，52 - 60，2010．
- 2) 布川真紀ら：外来化学療法患者の治療継続過程におけるセルフケア行動，日本看護研究学会雑誌 32(2)，93-100，2009．
- 3) 齋藤智子ら：外来で化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動と自己効力感の関連，日本がん看護学会誌，24(1)，23 - 34，2010．
- 4) 藤塚未奈子ら：外来化学療法を受けるがん患者のセルフケア能力に関連する要因の検討，共立女子大学看護学雑誌 = Kyoritsu journal of nursing 3，29-37，2016．
- 5) 林亜希子ら：外来がん化学療法患者における自己効力感の関連要因，日本がん看護学会誌，24(1)，2 - 11，2010．

- 6) Walter E. K. : The Opportunities and Challenges of Strengths-Based, Person-Centered Practice: Purpose, Principles, and Applications in a Climate of Systems Integration, Saleebey D., The Strength Perspective in Social Work Practice (Fifth Edition), Allyn & Bacon, Boston, 47-71, 2009.
- 7) Rapp. C. A., Goscha R. J. (2012) / 田中秀樹 (2014): ストレングスモデル リカバリー志向の精神保健福祉サービス (第3版), 金剛出版, 東京.
- 8) 神田清子: 系統看護学講座別巻 がん看護学, 医学書院, 東京, 2013.
- 9) 狭間香代子: 社会福祉の援助観 ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント, 筒井書房, 東京, 2001.
- 10) 岩本真紀, 藤田佐和: ストレングスの概念分析 - がんサバイバーへの活用 -, 高知女子大学看護学会誌, 38 (2), 12 - 21, 2013.
- 11) 江口研二: がん薬物療法における QOL 調査票, 日癌治 28(8), 1140-1144, 1993.
- 12) 福田一彦, 小林重雄: 自己評価式抑うつ尺度の研究, 精神神経学雑誌, 75, 673 - 679, 1973.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岩本真紀、萱原沙織、渡邊美奈、藤田佐和	4. 巻 34
2. 論文標題 再発・転移を経験したがんサバイバーがストレンクスを発揮して生きるプロセス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本がん看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1, 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩本真紀、藤田佐和
2. 発表標題 エキスパートナーが捉える再発・転移がんサバイバーのストレンクス
3. 学会等名 第36回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩本真紀、藤田佐和
2. 発表標題 再発・転移がんサバイバーに対するストレンクスに焦点をあてたエキスパートナーの看護実践
3. 学会等名 第38回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤田 佐和  (Fujita Sawa)  (80199322)	高知県立大学・看護学部・教授    (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------